

青目釈『中論』と *Akutobhayā* の異同について

—— 第1章「縁の考察」を中心として ——

安井光洋

0. はじめに

Mūlamadhyamakakārikā (MMK) は Nāgārjuna の主要著作であり、およそ 450 の詩頌で構成されている。同書では空、無自性、縁起といった思想が体系的に論じられており、後世の大乗仏教に大きな影響を与えたとされる。特にこの MMK の思想に基づいて成立した学派は中観派 (Mādhyamika) と呼ばれ、瑜伽行派と並んでインド大乗仏教の双壁をなす。

MMK はこの中観派の論師たちによって広く論考され、そして多くの注釈書が著された。そのような MMK 注釈書群の中で、本稿において取り上げる *Akutobhayā* (ABh) と青目釈『中論』(『青目註』) は中観派の思想史上でも比較的初期に成立したと考えられているものである。しかし、この両注釈書の歴史的あるいは思想的な位置付けに関しては未だに明らかになっていない点も多い。

たとえば、まず ABh はチベット訳のみが現存しており、伝承上は Nāgārjuna による自注であるとも言われるが、その真偽については定かでない。他方『青目註』は鳩摩羅什による漢訳のみが伝わっているが、この著者である青目という人物がいかなる人物であるかは資料が極めて乏しいためほとんど解明されておらず、また彼による他の著作も存在しない。

このように、これら 2 つの注釈書はその成立背景に関して未解決な部分を多く孕んだものであるが、両者の間には一つの大きな特徴が見受けられる。その特徴とは両者の内容に類似した箇所が多く見受けられるというものであり、これについては「元々は同一のテキストだったのではないか」という説¹⁾ さえ唱えられている。しかし、ABh の中に「青目 (Piṅgala)²⁾」という人名は見受けられず、『青目註』にも「*Akutobhayā* (『無畏論』)³⁾」という書名は見られないため、両注釈書が本来どのような関係にあったのかを確認することはできない。

また、ABh に関しては他にも *Buddhapālita-mūlamadhyamaka-vṛtti* (BP) や *Prajñāpradīpa* (PP) と

いった注釈書において、「ABh からの引用である」と明記されることなくその本文が引用されているという事実がある。なぜ BP や PP の著者がそのような方法で ABh を引用したかは定かではないが、このことから少なくとも ABh というテキスト自体は比較的早い段階で成立しており、それは多くの中観派論師たちによって認識されていたものと考えられる。

しかし、BP や PP は ABh と同じくチベット語訳⁴⁾ という形で現代に伝わっているものであるから文章上のパラレルを確認することはそれほど困難ではないが、『青目註』に関しては ABh と比較する際には漢訳とチベット語訳という言語上の相違があるため、正確にテキストとしての類似点を比定することは時として困難を極める。

よって本稿においてはこの 2 注釈書の中から、注釈としての文章的な内容の他にも特徴的な異同関係が見られる第 1 章「縁の考察」を対象として比較、考察することで MMK 注釈書としてどのような解釈の差異が生じているかについて検討してみたい。

1. 『青目註』と ABh の類似点

まず、第 1 章における ABh と『青目註』の類似点であるが、これについては第 2 偈と第 3 偈という以下の 2 偈の配置が一致しているということが挙げられる。

catvāraḥ pratyayā hetur ārambaṇam anantaram/
tathaiṅvādhīpateyaṃ ca pratyato nāsti pañcamah//
[MMK. Chap.1 - v.2]⁵⁾

諸縁には 4 種類ある。因、所縁、等無間、
そして、増上である。第 5 の縁は無い。

na hi svabhāvo bhāvānām pratyayādiṣu vidyate/
avidyamāne svabhāve parabhāvo na vidyate//
[MMK. Chap.1 - v.3]⁶⁾

まさに、諸事物の自性は縁などの中には存在しない。
自性が存在しないのなら、他性は存在しない。

この2つの偈は注釈書によって順序が異なっており、まずBP、PP、そしてCandrakīrtiの*Prasannapadā* (PSP) などBP以降に成立したとされる注釈書はすべて上記の順序で偈頌を配置している。

また、現在我々が参照可能なMMKのサンスクリット・テキストには主なものとしてBibliotheca Buddhica所収のPoussin版⁷⁾と、Giuseppe Tucciの写本に基づくde Jong版⁸⁾の2種があるが、いずれも上記の順序でこの2偈が配置されており、現代の研究においてもそれに従って表記されるのが一般的である。

他方、ABhと『青目註』はこれと逆の順序で偈を挙げ、注釈を施している。つまり、第2偈で「自性と他性の不成立」を説き、第3偈で「四縁の説示」を行うという構成である。このような構成の相違によって、それぞれの注釈書にどのような解釈の相違が生じるのかということについてはすでに拙稿[2011]においてABh、『青目註』、BPの3注釈書の比較という観点から卑見を述べたが、ここで改めてその概略を以下に述べることにする。

まず『青目註』とABhについては注釈内容⁹⁾は簡素であるが、偈頌のみを読んだ文脈としてはこちらの方が整合性があると考えられる。つまり、第1偈¹⁰⁾で提示される「自、他、両者、無因のいずれからも生じない」という四不生の説と併せて、その論証として第2偈に自性と他性を批判する偈を置くことで、いわば「不生の説」として立論し、そして第3偈で四縁による生起を説くことでそれに反論するという構図の方が第1偈から第3偈までの文脈として論理的に一貫性が伴ったものとなるのである。

他方BPの偈頌の配置では、第1偈の四不生に対して第2偈で「四縁から生ずる」と反論し、第3偈で「縁に自性は無いから生じない」と回答するという形になっている。この「四縁から生ずる」という反論はBPの注釈では「それら異なった4つの縁から諸事物は生じることになるのだから、『諸事物が他から生じることとは決して無い』というのは正しくない。」¹¹⁾というように四不生のうち「他からの生起」のみを動機として説かれている。

しかし、必ずしもこの偈頌自体は自、他、両者、無因のうち「他からの生起」のみを想定して説いているわけではない。よってこの解釈はBPの注釈によって成り立っている部分が大きいと言える。

それゆえBPは、注釈としては他の2つより詳細であるが、偈頌の配列については独自の解釈に与る部分が大きいため、これら2つの偈頌はBuddhapālita自身

あるいはその周辺において順序が入れ替えられた可能性があると考えられる。

そして以上の事から、『青目註』とABhの方が第2偈と第3偈においてはMMK本来の解釈に近く、古形を保っているという点で互いに共通しているということになる。

2. 『青目註』とABhの相違点

続いて『青目註』とABhの相違点であるが、これについては鳩摩羅什による翻訳という点に主眼を置きながら考察を進めていく。前述の通り『青目註』は羅什によって漢訳されたものであるが、彼によって翻訳された典籍はいずれも極めて流麗な文体を湛えている一方で、「思想家」鳩摩羅什としての側面がその訳文には強く反映されており、必ずしもサンスクリット原典の逐語訳とはなっていないことは広く知られるところである。そのため、MMKについても『青目註』の中の偈頌と比べた際に明らかに対応しないものが少なからず見受けられる。

また『青目註』は冒頭に付された僧叡の序文に「而辞不雅中。其中乖闕煩重者。法師皆裁而裨之。於經通之理尽矣。」¹²⁾とあることから、偈頌だけでなく注釈部分に関して羅什による加筆、修正が加えられているようである。

しかし、ここで問題となるのは羅什によって意識、加筆されているのはどの箇所であるかということである。上記の序文による指摘を踏まえると『青目註』の原文はよりABhに近い内容であったという可能性も考えられるが、その近似性がどの程度のものであったかを正確に知ることは不可能である。そのため、ABhとの相違点すべてがとりもなおさず羅什によって書き換えられたものであると断定することもできない。

よって以下では、MMKおよびABhと比較したうえで羅什による加筆箇所の比定を試みたい。具体的な手順としては、まずサンスクリット語との比較が可能な偈頌部分から意識箇所を確認し、それに基づいて注釈部分の加筆、修正箇所と考えられる点を検討していく。

まず偈頌であるが、第1章の中で羅什によって意識されていると考えられる偈頌は第4偈から第9偈¹³⁾である。よって以下にその偈頌を挙げるが、比較のために逐語訳の訳例としてABhのチベット語訳の偈頌も併記する。

[第4偈]

kriyā na pratyayavatī nāpratyayavatī kriyā/
pratyayā nākriyāvantaḥ kriyāvantaś ca santy uta//¹⁴⁾

bya ba rkyen dang ldan ma yin// rkyen dang mi ldan bya ba med//
bya ba mi ldan rkyen ma yin// bya ba ldan nam¹⁵⁾ 'on te na//¹⁶⁾

果爲從緣生 爲從非緣生 是緣爲有果 是緣爲無果¹⁷⁾

[第5偈]

utpadyate pratīyemān itīme pratyayāḥ kila/
yāvan notpadyata ime tāvan nāpratyayāḥ katham//¹⁸⁾

'di dag la brten skye bas na// de phyir 'di dag rkyen ces grag//
ji srid mi skye de srid du// 'di dag rkyen min ji ltar min//¹⁹⁾

因是法生果 是法名爲緣 若是果未生 何不名非緣²⁰⁾

[第6偈]

naivāsato naiva sataḥ pratyayo 'rthasya yujyate/
asataḥ pratyayaḥ kasya sataś ca pratyayena kim//²¹⁾

med dam yod pa'i don la yang// rkyen ni rung ba ma yin te//
med na gang gi rkyen du 'gyur// yod na rkyen gyis ci zhiḡ bya//²²⁾

果先於緣中 有無俱不可 先無爲誰緣 先有何用緣²³⁾

[第7偈]

na san nāsan na sadasan dharmo nirvartate yadā/
katham nirvartako hetur evaṃ sati hi yujyate//²⁴⁾

gang tshe chos ni yod pa dang// med dang yod med mi 'grub pa//
ji ltar sgrub byed rgyu zhes bya// de lta yin na mi rigs so//²⁵⁾

若果非有生 亦復非無生 亦非有無生 何得言有緣²⁶⁾

[第8偈]

anārambaṇa evāyam san dharmo upadiśyate/
athānārambaṇe dharme kuta ārambaṇaṃ punaḥ//²⁷⁾

yod pa'i chos 'di dmigs pa ni// med pa kho nar nye bar bstan//
de ltar chos 'di dmigs med na// dmigs pa yod par ga la 'gyur//²⁸⁾

如諸佛所說 眞實微妙法 於此無緣法 云何有緣緣²⁹⁾

[第9偈]

anutpanneṣu dharmeṣu nirodho nopapadyate/
nānantaram ato yuktam niruddhe pratyayaś ca kaḥ//³⁰⁾

chos mams skyes pa ma³¹⁾ yin na// 'gag pa 'thad par mi 'gyur ro//
de phyir de ma thag mi rigs// 'gags na rkyen yang³²⁾ gang zhiḡ yin//³³⁾

果若未生時 則不応有滅 滅法何能緣 故無次第緣³⁴⁾

これらの偈頌を比較すると、まず第4偈の *kriyā* がチベット語訳では *bya ba*、漢訳では「果」と訳されている。続く第5偈にも「果」という語が見受けられるが、これはサンスクリット、チベット語訳ともに該当する語が見受けられない。そして第6偈では *artha* がチベット語訳では *don* と訳されており、漢訳では「果」と訳されている。そして第7偈と第9偈では *dharma* が *chos* とチベット語訳され、そして漢訳ではやはり「果」になっている。

これについて、*kriyā* を *bya ba*、*artha* を *don*、そして *dharma* を *chos* とするチベット語訳に然したる問題はないと思われるが、これらのサンスクリット語すべてを「果」と訳す漢訳についてはあまり一般的な訳例であるとは言えない。

このような訳例について『青目註』の他の章を参照すると、MMKの *kriyā* という語を羅什はここ以外ではすべて「作」と訳しており、こちらの方が *kriyā* の訳語としては一般的である。そして *artha* と *dharma* に関してはいくつかの訳例が見受けられるが、「果」と訳されているのは上述の例のみである。

一方、この「果」にあたる語がサンスクリット語やチベット語訳で出てくるのは、第1章では第11偈以降からであり、ここでは *phala* (結果) という語が用いられ、チベット語では *'bras bu* と訳されている。そして、漢訳ではこの *phala* も同様に「果」と訳されている。

以上の点から、上記の偈頌で用いられている「果」という訳語は羅什による意識であると考えられる³⁵⁾。最終的に羅什の訳では第1章全14偈のうち9偈で「果」という訳語が用いられており、そのうち5つがサンスクリット語にもチベット語訳にも対応していないことから、羅什によって意識されているものと考えられる。

それでは、羅什はどのような意図に基づいてこのような意識を行ったのか。これについて羽溪[1930]は、章の中で羅什が一貫してこの「果」という訳語を用いることによって「文面を単純にして問題をはっきりさせる」³⁶⁾ という効果があると解説している。

たしかに *kriyā*, *artha*, *dharma* 等、様々に使い分けられている表現を一貫して「果」と意識する方が、生じさせる因としての「縁」とそれによって生じた「果」という関係性がより強調され、第1章全体の論旨としても明確なものとなるだろう。

それでは偈頌に羅什のこのような意識が認められるのに対して、注釈部分はどのようにになっているのだろうか。まず第4偈について ABh の注釈を見ると「作用のようなものは、すでに燃えたものと、まだ燃えていないもののものであるので、そこで四縁によって諸事物の作用を説くということは不合理である。」³⁷⁾ とあることから、ABh が偈頌の *bya ba* (*kriyā*) を「四縁によって諸事物が生じる作用」と解していることが分かる。そして、すでに燃えてしまったものにも、まだ燃えていないものにも燃えるという作用が無いように、それはナンセンスなものであると批判する。

ABh がこのように第4偈の *bya ba* (*kriyā*) を四縁として解釈しているのは、この前の第3偈で四縁に基づいた観点からの批判が行われていることによる。それゆえ、このような解釈は第3偈に反論者の偈頌を置くという ABh の構成を前提としたものであるため、BP や PSP といった他の注釈書には見られない。

これに対して『青目註』の第4偈の注釈は「若謂有果。是果爲從縁生。爲從非縁生。若謂有縁。是縁爲有果爲無果。二俱不然。」³⁸⁾ というように、ほとんど意識された偈頌の内容が反復される程度の注釈しか施されておらず、ABh のように第3偈の四縁説への言及もされていない。しかしながら、注釈の内容としては明らかに偈頌の意識を踏襲したものであるから、少なくともこの部分に関しては原典に基づく記述ではなく、羅什によって書き換えられたものであると判断していいだろう。

ここで、先に挙げた ABh の注釈と比較すると、『青目註』は羅什によって MMK の様々な語が「果」と共通した意識をされることによって論旨が明確になるという見解を先に述べたが、この第4偈においては ABh の方が第3偈の四縁説を踏まえて注釈をすることで、偈頌から偈頌へのつながりに一貫性が伴ったものとなっている。その点では ABh の方に文脈上の整合性が認められるといつてよい。

また、縁 (*pratya*) と果 (*phala*) の関係性については前述の通り第11偈以降で論じられるものであるから、この意識された『青目註』の第4偈では内容がそれと重複してしまっている点もある。そのため、このような『青目註』の解釈よりもむしろ偈頌を逐語訳したうえで、生じさせる縁 (*pratya/rkyen*)、生じる作用

(*kriyā/bya ba*)、そして生じた結果 (*phala/bras bu*) として分析的に考察する ABh の方が第4偈の解釈として合理的であり、第1章全体の論旨としても MMK 本来の意図に近い解釈をしていると考えられる。

しかし、ABh も他の偈頌を参照すると、『青目註』のような解釈が見られないわけではない。それに関しては、まず第5偈の「これらによって生じるので (*di dag la brten skye bas na*)」³⁹⁾ という箇所が注釈では「これらによって諸事物が生じるので (*di dag la brten nas dngos po rnams skye bas na*)」⁴⁰⁾ というように偈頌にはない「諸事物 (*dngos po rnams*)」という語が「生じる」の主語として補われており、さらに第6偈では「無あるいは有の対象にも縁は妥当ではない (*med dam yod pa'i don la yang// rkyen ni rung ba ma yin te*)」⁴¹⁾ という偈頌が注釈では「縁は事物が無いときのものであるか、あるときのものであるかといえば両者とも不合理である。(*rkyen ni dngos po med pa'i 'am/ yod pa'i yin grang na/ gnyi gar yang mi 'thad de*)」⁴²⁾ として偈頌の「対象 (*don*)」という語がこれも注釈では「事物 (*dngos po*)」という語にパラフレーズされている。

これは『青目註』の「果」という語が第5偈で補われ、第6偈で *artha* というサンスクリット語から意識されている例と類似している。また、この2偈のみだけでなく「事物 (*dngos po*)」という語が用いられていない第3偈と第4偈でも注釈部分ではこの語が補われており、結果的に第1偈から第6偈までの注釈では主語は常に「事物 (*dngos po*)」となっている。

上記のような ABh の記述は注釈としては何ら特異なものではなく、むしろ韻律の制約によって欠落している偈頌の語を補うという意味では至極当然なものである。しかしながら、論旨の一本化を図るという意味においては羅什による偈頌の意識と同心円上の着想であるといえる。

このことから、翻訳という作業を経て付与された羅什の独自性は主として第4偈において *kriyā* を意識したことと、その訳語として「果」を用いたという2点であり、他方第5偈における主語の補完や、第6偈の *artha* のパラフレーズについては ABh の注釈においても共通した解釈が認められることから、必ずしも羅什オリジナルの発想ではないと考えられる。それはつまり、第5偈や第6偈の解釈は『青目註』の原典的なものであり、『青目註』の原典がやはり ABh に近似したものであったという可能性を改めて窺わせるものである。

3. 結語

以上、『青目註』と ABh について類似点と相違点という 2 点から両注釈書の内容を検討してきた。類似点の考察によりこの両注釈書が他の注釈書以上に互いに近似したものであることがわかり、相違点については羅什による意識、加筆とその影響について論じた。

上述のような個々の意識そして注釈の加筆という羅什による一連の作業は、たしかに論点を明確にし、論旨を一貫性のあるものとしているが、一方では第 4 偈における作用の考察のように MMK 本来の解釈からの乖離も窺えた。

このように羅什による『青目註』の意識、加筆は必ずしも『青目註』の内容をより深め、発展させるばかりではなく、「乖闕煩重」という訳者の主観的な判断によって『青目註』本来、さらには MMK 本来の解釈を取りこぼしているという側面もある。それゆえ、そのような場合には ABh の方が MMK に忠実な解釈を述べていると考えられる。そして、今回挙げた箇所はそれを示す一例であると言えよう。

註

- 1) 丹治 [1982]
- 2) 五島 [2004]、同 [2007]
- 3) 斎藤 [2003]
- 4) BP に関しては近年サンスクリット語写本の断片が確認されている。しかし、残念ながら本稿において論じる第 1 章はその中に含まれていない。
Ye Shaoyong [2006]
“The *Mūlamadhyamakārikā* and Buddhapālita's Commentary(1):
Romanized Texts Based on the Newly Identified Sanskrit Manuscripts from Tibet”
創価大学国際仏教学高等研究所年報 第 10 号
pp.117 -148
Ye Shaoyong [2007]
“The *Mūlamadhyamakārikā* and Buddhapālita's Commentary (2) :
Romanized Texts Based on the Newly Identified Sanskrit Manuscripts from Tibet”
創価大学国際仏教学高等研究所年報 第 11 号
pp.105 -152
- 5) de Jong [1977] p.2
- 6) *ibid.* p.2
- 7) LVP [1903-1913]

8) de Jong [1977]

9) D.33a7-34a1, P.39a6-40a2

'dir smras pa/ khyod kyis rim pa rnam pa bzhi po gang
dag gis dngos po rnams skye ba med par dpyad pa de
rigs pa gang gis ji ltar mi 'thad par shes par 'gyur/
'dir bshad pa/
dngos po rnams kyi rang (D.33b) bzhin ni//
rkyen la sogs la yod ma yin//
bdag gi dngos po yod min na//
gzhan gyi dngos po yod ma yin// (v.2)
dngos po rnams kyi zhes bya ba ni chos rnams kyi'o//
rang bzhin ni zhes bya ba ni/rang gi dngos po ni rang
bzhin te/ bdag nyid kyi dngos po zhes bya ba'i tha
tshig go// rkyen la sogs la zhes bya ba ni rgyu la sogs
pa dag la zhes bya ba'i tha tshig (P.39b) go//sogs la
zhes bya ba'i sgra smos pa ni/ gzhan mu stegs can dag
gis rkyen bstan pa thams cad bsdu pa'i phyir ro//yod
ma yin zhes bya ba ni rgyu bstan pa sngar btang ste/
yod pa ma yin no zhes dgag pa'i don to//bdag gi dngos
po zhes bya ba ni bdag nyid kyi dngos po zhes bya ba'i
tha tshig go//yod min na zhes bya ba ni yod pa ma yin
na zhes bya ba'i don to//gzhan gyi dngos po zhes bya
ba ni gzhan gyi ngo bo nyid ni gzhan gyi dngos po ste/
bdag nyid kyi dngos po ma yin pa zhes bya ba'i tha
tshig go // yod ma yin zhes bya ba ni yod pa ma yin no
zhes bya ba'i don to//gang gi phyir dngos po rnams kyi
rang bzhin rkyen la sogs pa dag la yod pa ma yin pa
de'i phyir dngos po rnams bdag las skye bar mi 'thad
do//gang gi phyir bdag gi dngos po yod pa ma yin na /
gzhan gyi dngos po yod ma yin pa de'i phyir dngos po
rnams gzhan las skye bar mi 'thad do/ /bdag gi dngos
po dang gzhan gyi dngos po yod pa ma yin pas dngos
po rnams gnyis las skye bar mi 'thad do//rgyu med
pa ni tha chad kho na yin pas de las kyang dngos po
rnams skye bar mi 'thad do//
'dir chos mngon par shes pa dag gis smras pa/
rkyen rnams bzhi ste rgyu dang ni//
dmigs pa dang ni de ma thag //
bdag po yang ni de bzhin te//
rkyen lnga pa ni yod ma yin// (v.3)
rab tu byed pa rtsom pa dag gis rnam grangs de dang
de dag gis bstan pa rkyen ji snyed gang dag
brjod pa de dag thams cad ni rkyen bzhi po 'di
dag nyid du 'dus pas rkyen lnga pa yod pa ma
yin no//rkyen bzhi po gang dag tu 'dus she na/

rgyu'i rkyen ni bskyed pa'i don gyis so// (P.40a)
dmigs pa'i rkyen ni rten gyi don gyis so// de ma thag
pa'i rkyen ni bar du ma chod pa'i don gyis so/ /bdag
po'i rkyen ni dbang byed pa'i (D.34a) //don gyis te/
rkyen bzhi po de dag gis dngos po rnams kyi bya ba
dang skye ba dang 'byung ba dang/ rgyu'i nmam grangs
kyi sgra brjod do//

大正蔵 vol.30 p.2b-c

如諸法自性 不在於緣中

以無自性故 他性亦復無 (第2偈)

諸法自性不在衆緣中。但衆緣和合故得名字。自性
即是自體。衆緣中無自性。自性無故不自生。自性
無故他性亦無。何以故。因自性有他性。他性於他
亦是自性。若破自性即破他性。是故不應從他性生。
若破自性他性即破共義。無因則有大過。有因尚可
破。何況無因。於四句中不生不可得。是故不生。

阿毘曇人言。諸法從四緣生。云何言不生。何謂四緣
因緣次第緣 緣緣増上緣

四緣生諸法 更無第五緣 (第3偈)

一切所有緣。皆攝在四緣。以是四緣萬物得生。因
緣名一切有爲法。次第緣除過去現在阿羅漢最後心
心數法。餘過去現在心心數法。緣緣増上緣一切法。

10) na svato nāpi parato na dvābhyāṃ napy ahetutah/
utpannā jātu vidyante bhāvāḥ kvacana kecana//
[MMK.Chap.1 - v.1] de Jong [1977] p.2

11) [D.162a3 - 4, P.182b7 - 8]
gang gi phyir rkyen bzhi po gzhan du gyur pa de dag
las dngos po rnams skye bar 'gyur ba de'i phyir dngos
po rnams gzhan las skye ba med pa kho na'o//zhes bya
ba de bzang po ma yin no//

12) 大正蔵 vol.30 p.1a

13) 『青目註』は冒頭の帰敬偈を第1章の第1偈と第
2偈として数えるため、厳密には他の注釈書とは
順番が2つずつずれる。しかし、今回は混乱を避
けるため他本の順番に従って表記する。また、『青
目註』では他本の第8偈と第9偈に当たる偈頌の
順序が逆になっている。先に挙げた第2偈 (ABh
と『青目註』では第3偈) では所縁縁、等無間縁
という順序で示されているので、ここでも第8偈
を所縁縁、第9偈を等無間縁を説く偈頌とするの
が妥当であろう。よってこれについても同様に他
本の順番に従って表記する。

14) de Jong [1977] p.2

15) P.yod

16) D.34a1 , P.40.a2

17) 大正蔵 vol.30 p.2c

18) de Jong [1977] p.4

19) D.34a3 , P.40a6

20) 大正蔵 vol.30 p.2c

21) de Jong [1977] p.4

22) D.34a5, P.40a8

23) 大正蔵 vol.30 p.2c

24) de Jong [1977] p.4

25) D.34a6-7, P.40b2-3

26) 大正蔵 vol.30 p.3a

27) de Jong [1977] p.4

28) D.34b1-2, P.40b5

29) 大正蔵 vol.30 p.3b

30) de Jong [1977] p.4

31) D.pas

32) P.kyang

33) D.34b3-4, P.40b7-8

34) 大正蔵 vol.30 p.3a

35) これについては羅什の読んでいたサンスクリット原
典の文面が異なっていたという可能性も考えられる
が、これだけの広範囲に渡って他本との差異が認め
られることを考慮すると、やはり羅什によって意識
されたものと考えるのが妥当であろう。

36) 羽溪 [1930] p.65

37) D.34a3, P.40a5 - 6

bya ba bzhin nam/ bsregs pa dang ma bsregs pa bzhin pas
de la rkyen bzhi po dag gis dngos po rnams kyi bya ba
brjod do zhes gang smras pa de rigs pa ma yin no//

38) 大正蔵 vol.30 p.2c

39) D.34a3-4, P.40a6

40) D.34a4, P.40a6

41) D.34a5, P.40a8

42) D.34a5, P.40a8

略号および使用テキスト

ABh : *Mūlamadhyamaka-vṛtti-akutoḥayā*, D. No.3829, P.
No.5229

BP : *Buddhapālita-mūlamadhyamakavṛtti*, D. No.3842, P.
No.5242

D. : sDe dge edition

MMK : *Mūlamadhyamakakārikāh* → de Jong [1977]

P. : Peking edition

PP : *Prajñāpradīpa-mūlamadhyamaka-vṛtti*

PSP : *Mūlamadhyamaka-vṛtti-Prasannapadā*

『青目註』：青目釈『中論』 大正蔵 Vol.30 No.1564

参考文献

宇井伯寿

1921:「三論解題」『国訳大蔵経』論部5 国民
文庫刊行会 pp.1-75

斎藤明

1988:「初期中観派とブッダパーリタ」『仏教学』
第24号 pp.29-512003:「『無畏論』の著者と成立をめぐる諸問題」
『印度学仏教学研究』51-2 pp.869-875

丹治昭義

1982:「無畏と青目註」『印度学仏教学研究』
31-1 pp.83-88

寺本婉雅

1974:『梵漢独対校・西藏文和訳ナーガルジュナ
造・中論無畏疏』国書刊行会

羽溪了諦

1930:「中論」『国訳一切経 中観部一』大東
出版社 pp.1-50

安井光洋

2011:「初期中観派における『中論』注釈書につ
いて 一第1章・第2偈、第3偈の異同をめぐっ
て」『智山学報』第60輯 pp.101-113

Huntington, C.W.

1986: The “Akutobhayā” and Early Indian
Madhyamaka, vol.I,II, Ph.D Thesis,
The University of Michigan

de Jong, J. W.

1977: Nāgārjuna Mūlamadhyamakakārikāḥ,
The Adyar Library and Research Centre,

Louis de la Valée Poussin (= LVP)

1903-1913: Mūlamadhyamakakārikās
(mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la
prasannapadā Commentaire de Condrakīrti.
Bibliotheca Buddhica IV, St. Petersburg

Saito Akira

1984: A study of the Buddhapālita-mūla-
madhyamakavṛtti, Ph.D Thesis,
The Australian National University